

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 3章 1～9 節

○この世の知恵とまるで異なる神の知恵を語り(2:6～9)、この知恵はただ霊によって理解できると主張したパウロ(2:10～16)。パウロにとって本当に大切なのは、小賢しいこの世の知恵を誇りにして振りかざすのではなく、「神の霊」を受けて、「神のこと」を認識できるようにしていただくことだった。聖霊に自らを委ねる奥義を体得し、「神のこと」を認識させていただき、宣教に用いられていく人々をパウロは「霊の人」と表現する。しかし今回の聖書箇所(3:1～9)で、パウロは実際のコリント教会のごたごたに目を向けて、誰もこの「霊の人」の段階に達していない事実を厳しく指摘する。そして、コリント教会の人々がそれぞれある宣教者を、本人に認められてもいないのに勝手に担いでグループを作り、争っている状況を前に、そもそも宣教者とは何なのかという宣教者論を農業と建築の譬えを用いて展開していく。そして、「宣教者とは何者でもない。重要なのは神様であり、宣教者とはこの神様に仕え、神様のために力を合わせて働く者なのだ。教会という『神の畑、神の建物』のために働いていく者なのだ」と主張し、コリント教会の人々がそうしたことも弁えず、神様を頭としないでそれぞれ一人の宣教者を担ぎ回って党派争いをしている状況を鋭く批判する。

- ・このように今回の聖書箇所は、コリント教会の争いの根にあった宣教者についての無理解を正し、教会を本来あるべき姿に戻そうとしたパウロの牧会的配慮に溢れる箇所にならない。

【注解】

○「兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語ることができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました。わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかつたからです。いや、今でもできません。相変わらず肉の人だ

からです。お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。ある人が『わたしはパウロにつく』と言い、他の人が『わたしはアポロに』などと言っているとすれば、あなたがたはただの人にすぎないではありませんか。」(1~4節)

- ・パウロの論敵たち→自らの知恵を誇りにし、さらに礼拝の中で霊的熱狂状態になって、自分は特別な霊の賜物を受けて完全な者になったと主張していた。そして他の弱い信徒や教会外の人々を見下して「肉の人」、「ただの人」と言い、自らを「成熟した人」と呼んでいた。
- ・そんな彼らの主張をパウロは一蹴する。

コリントで最初に宣教活動に従事した時のことを振り返って、「わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語る事ができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語」った、「わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与え」なかつたと、福音宣教の方法において十分な配慮をしてきたことを明らかにする。そして、「あなたがたは今でも固い物を口にすることができない」と、時の経過とともに当然成長が期待されるにもかかわらず、依然として信仰的に幼い未熟な者、「乳飲み子」のような状態であると断言する。

- ・それは、コリント教会において「お互いの間にねたみや争いが絶えない」からに他ならない。その事実そのものが、今なおコリント教会の人々が「肉の人であり、ただの人として歩んでいる」ことを雄弁に物語っているのではないかと、パウロはある人々が実際主張していたスローガンも引用しながら痛烈に批判する(「ある人が『わたしはパウロにつく』と言い、他の人が『わたしはアポロに』などと言っているとすれば、あなたがたはただの人にすぎないではありませんか。」)。

※「ただの人として歩んでいる」→ギリシア語の原意は「人間(的基準)によって歩く」

- 「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロ

は水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」(5～7節)

- ここでパウロは改めて二人の代表をもって宣教者とは何者であるかを問う。しかしその答えは、むしろ問いそのものをも問う内容のものである。彼らは何者でもない。重要なのは宣教者ではなく神様なのだと言及する。パウロは答える。パウロとアポロはあくまでもこの神様に「仕えた者」に過ぎない。
 - 福音宣教者たちは「仕える者」(新改訳では「しもべ」)として、「主」なる神様の目的に応じて人々が信仰に目覚めるために聖霊の道具として用いられる存在である。彼らの働きは、「主がお与えになった分に応じて」とあるように徹頭徹尾神様に頼っている。彼らの働きの目的が神様の御旨のためであるというだけでなく、働きの原動力もすべて神様に源を持っている。それゆえ、彼らは決して自らを誇ることはできない。ましてコリント教会の人々が、このような立場と役割に生きる福音宣教者を推し立てて、互いに対立してそれぞれのグループを誇るなど全くの誤解であるとパウロは激しく迫っている。
 - パウロはさらに福音宣教者の役割を農業のたとえを用いて説明する。福音そのものは、常に成長し続ける生命をその中に秘めた種と言えよう。その種をパウロが「植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神」だと、パウロは福音宣教者の立場と役割を、神様御自身の偉大な御計画と働きの背景の中で正しく位置付けて説明する。「植える者」も「水を注ぐ者」も決して福音宣教の中心的人物ではない。彼らは「成長させてくださる神」の道具に過ぎない。それゆえ、コリント教会の人々は福音宣教者に注意を集中するのではなく、彼らを用い、生き生きと働かれる神様御自身に目を向けて、すべての賛美と感謝を神様に献げるべきだというのがパウロの主張である。
- 「植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることとなります。わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。」(8～9節)
- 福音宣教者は働きの違いで優劣をつけられるような存在ではない。福音宣教者はそれぞ

れ役割や立場が違って「一つで」、「神のために力を合わせて働く者」である。彼らはそれぞれの使命と賜物を与えられており、終わりの日に各自にふさわしい「報酬を受け取ることにな」とパウロは言う。

- ・こうした福音宣教者間に見られる統一性と多様性は、教会全体に与えられている「霊的な賜物」の現れにおいても同じことが言えるのであり、パウロは12章でこの点について詳しく論じている。教会は一つの「キリストの体」であり、そこに集う一人ひとは「部分」としてそれぞれ独自の使命と賜物を与えられている。その皆が「神のために力を合わせて働く」のが教会であると説明される。
- ・5～8節の結論として、パウロはコリント教会を「神の畑」にたとえるだけでなく、「神の建物」と呼んで、10節以降でさらに福音宣教者の責任について論を展開していく備えをする。
- ・「畑」も「建物」も、神様が現にそこで働かれている点が強調されており、福音宣教者はそのフィールド、その神様のもとで賜物と役割を与えられて「力を合わせて働く」のである。

○本日の聖書箇所から思うこと

- ・パウロの宣教者論がよく分かる箇所。
- ・教会に集う皆が福音宣教者と言えるが、私たちはそれぞれ役割や立場が違って「一つで」、「神のために力を合わせて働く者」である。そして、その福音宣教の中心にはいつも神様が働いておられるのであり、すべての栄光はこの神様に帰されなくてはならない。
- ・時々牧師で洗礼を受けるのを自分の功績や手柄のように考えて、「自分は何人に洗礼を受けた」ということを誇りにしたり、「自分はまだ一人も洗礼を受けたことがないから、自分から洗礼を受けてくれ」と他人に頼んだりする人がいるが、そんなことは言語道断である。洗礼に関しても、それは神様が為さる業であり、牧師はそれに用いられる器に過ぎない。洗礼のタイミングも神様がお決めになることであり、牧師の勘違いした都合で決められてはならない。